

小林隆児〔著〕

## 『あまのじやくと精神療法』

〔甘え〕理論と関係の病理

評者▼佐藤幹夫

弘文堂  
本体 3400円

著者は、「関係発達臨床」という方法を三〇年にわたって手放さずしてきた。さぞや闘いの連続だったろうと推測されるが、それでも撤退しなかったのは、臨床家としての矜持ゆえだろうと思う。現在、さらに旺盛な執筆意欲のなかにあるが、本書は、「関係発達臨床」に邁進してきた著者の、ひとまずの到達点である。

少しばかり振り返ってみる。二〇年前、評者の学校現場でも、構造化とか、できる状況づくりとか、認知とか、さまざまな学習理論が競われていた。評者は、「いや、それでも子どもとの「関係づくり」に尽きる」という確信を離さずにいたが、そんなものは主観的で立証不能、言語化不可能、悪しき経験主義、などと反対する意見はいくらでも現れた。だから著者の仕事に初めて触れ

た時には、まさにわが意を得たりだった。

そこで手にした武器は二つ。一つは原初的知覚。もう一つは情動交流。当初、「自閉症」の子どもたちの言動は不思議以外の何ものでもなかったのだが、原初的知覚と力動感が彼らの世界を深く染め上げ、強い緊張と不安をもたらしている。あるいは、言葉をもたない子どもたちとの交流がなぜ成り立つのか。それが深まっていく手応えはどうして起こるのか。言葉は話さなくとも情動交流はなされており、言葉のやりとりの中でもそれは生じている——こうした著者の指摘は重要なヒントになった。

もう一つあった。自閉症と呼ばれる子どもを相手に、ある教師はとてもうまくかかわることができないのに、別の教師になるとすぐに双方の

緊張が高まり、こじれ、結局パニックになる。岡目八目の観察をすれば、過剰で不用意な言葉がけ、間合いの悪さなど、いくつかの手違いが目につく。著者が「甘えとアンビヴァレンス」という概念を前景化させるのは二〇一〇年前後だと記憶するが、まさにあれがアンビヴァレンスな状況だったのだとすぐに合点がいった。……という具合に、関係を丹念につくろうと考えている人間にとって、著者の仕事は大きな武器になってきた。

もう一つ。本書において治療のキーワードとされるのが、「メタファ」である。本来なら「甘え」として表現されるべき言動がさまざまに屈折した表象となっている時、それをメタファとしてとらえることで、ある治療的気づきを生じさせる。なぜか。一つは患者と治療者との間で何ごとかの共有がなされること。もう一つは、患者自身が自分をモニタリングするきっかけになること。だからこそ本書では「甘えのアンビヴァレンス」ではなく「あまのじやく」という語が選ばれているのだが、この間の経緯については、少しばかり推測を挟ませていただく。

二〇〇〇年代の後半から本書に至るまでの間、著者には、重要なターニングポイントが少なくとも二度あったのではないか。一つは、母子ユニット(MIU)での臨床データを積み上げる仕事と並行させながら、土居健郎の「甘えの理論」とヨーロッパ輸入の「アタッチメント理論」との比較検証を徹底しておこなったこと。両者はどう異なるのか。それはなぜか。その一端が「甘えとアタッチメント」(遠見書房)で報告されているが、日本人に特有の「甘え」こそが治療のキーワードになるという確信は、この研究からつかんだはずである。

二つ目。日常語で考えて記述するという臨床スタイルの、重要性の発見。ここにも土居の影響がみられるのだが、甘えもアンビヴァレンスもまさに千差万別であり、そこから病理に至るプロセスも千差万別である。患者のアンビヴァレンスや症状が精緻に見えれば見えるほど、さらに細かな観察と、身体性溢れる日本語表現が要請される。本書を到達点と評したのは、その筋道をはっきりと示しているがゆえであった。

(さとう・みきお／フリージャーナリスト)